

町に恩返しをしたい！  
そんな途な思いで  
定住を決意



From... 札幌市  
To... 秩父別町  
株式会社 秩父別振興公社  
農産物加工センター「くるり」担当  
気田 みゆきさん(23歳)



# この土地で暮らす理由

経験者に聞く  
移住+仕事  
本当のトコロ

人生を大きく変える「移住」という選択。  
決断の裏側を、経験者に聞いてみました。

農業に関わる仕事に就きたいと、札幌市から秩父別町へ。地域おこし協力隊の任期を終え、今春から、新たな生活が始まりました。任期満了後も町に残ると決めた胸の内には、「町の役に立ちたい」という強い思いがありました。

地域おこし協力隊での  
かけがえのない3年間で  
新たな夢の原動力に



## 秩

父別町は、石狩平野の北端に位置する農業の町です。道内屈指の優良米の産地であり、名産のフクロコメは、本州の高級料亭からも引き合いがくるほどの高品質を誇ります。田園風景が美しいのどかな町に、「農業に関わる仕事をした」と、気田みゆきさんが移り住んだのは、2011年のこと。

気田さんは札幌市出身。高校卒業後、農業専門学校に進学し、野菜栽培技術などを学びました。就職活動の際、たまたまネットで「秩父別町地域おこし協力隊」の募集を見つけたことが、この町に来るきっかけとなったんです。少しでも農業に携わりたいいな、という思いと、協力隊の他の業務の興味もあって、応募しました。その思いは叶い、秩父別町初の協力隊に採用されました。

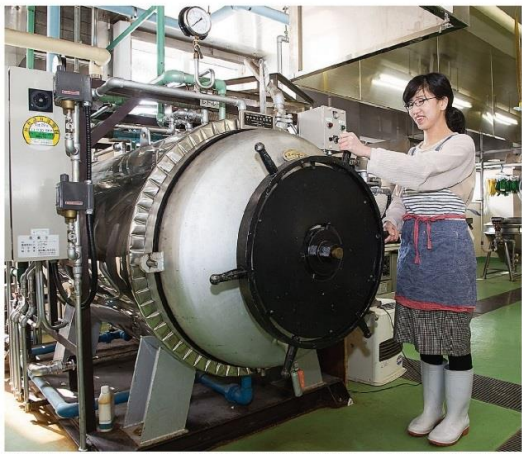
最初の2年は、町の交流体験農園「なつみの里」で野菜作りや同施設の運営を担当。希望の仕事に就けたものの「農業の難しさをしみじみ感じました」と気田さん。「天候などに合わせて、その都度適切な判断を下し、対応しなければならぬ。

大変な仕事だと実感しました」

2年目の冬に、「農産物加工センター「くるり」」の管理者を任せられました。「くるり」は、町民が農作物の加工品作りなどに利用できる施設で、秩父別特産のトマトジュース「あかずきんちゃん」も、ここで生産されています。気田さんの仕事は、利用者の応対や利用促進のための企画作りなど。この春、協力隊の任期を満了しましたが、現在は秩父別振興公社の職員として、引き続き同施設で働いています。任期満了で、この町を離れるという選択肢もあったのでは、と聞くと「それは考えませんでした。協力隊の時は役場や農家の方がよく支えてくれたので、少しでも恩返ししたいんです」

もともと田舎暮らしに憧れていたそう、秩父別町の静かで穏やかな生活も気に入っているよう。「四季折々で変わる畑の風景がとってもキレイなんです。車があれば、買い物もそれほど不便ではないですよ」

いまは、「くるり」をもっと町民に利用してもらうことが、一番の目標。町の味噌作り名人などを先生に迎える「近所先生加工教室」といったイベントを企画し、利用促進に努めています。「いつか、そんなイベントから町の新名物が生まれると、うれしいですね」と笑う気田さん。協力隊での貴重な経験を糧に、新たな夢に向かって歩み始めました。



「くるり」には、業務用オーブンやガス釜など、大型調理器具がずらり。レトルト処理ができる装置など、一般の利用者には使いこなせない器具を操作するのも、気田さんの仕事です



### 一言・ア・ド・バ・イ・ス



移住する前に、どんな町なのか下見をしておいた方がいいです。その方が移住後の生活がイメージしやすいと思います。あとやっぱり、車はあった方が何かと便利です。